慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	内蒙古・ 長城地帯(東亜考古學會發行)
Sub Title	
Author	橋本, 増吉(Hashimoto, Masukichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.3 (1935. 12) ,p.162(528)- 163(529)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19351200-0162

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

內蒙古・長城地帶（東亞考古學會發行）

東洋史の成立に對して最も重大なる障碍を與へてゐる事實は、支那文明と西方文明との交渉傳播に最も與つて力あつたと推せらるゝ、塞外西域に於ける古代諸民族の歷史が、殆ど全く湮滅に歸してゐることである。蓋し、これ等の諸民族は比較的後世に至つて始めて自ら文字を有した爲めに、古代の史實に就ては全く之れを傳ふべき手段を有しなかつたばかりでなく、自ら文字を有する時代となりても、その記錄は後世に傳はること稀れであり、會々之れを傳ふるものあるも、今なほ之れを讀解すること能はざる場合も存する有樣で、亞細亞諸民族間の文化交渉を解明する上に於て、多大の困難を感ずるのである。是に於て、一部の歷史家には東洋史の成立を疑ふものを生じ、或は歷史は有機的團體生活をなす、社會の文化的發達階梯を解說するにありとなし、殆ど全く一社會としての關聯を有しない、亞細亞諸民族の綜合的歷史の成立を否定せんとするものも存するのであるが、かくの如き疑問や僻說を生ずる所以のものも、一には亞細亞諸民族の歷史が多く湮滅に歸しその文化史的使命が十分に闡明せられ得なかつた爲めである。されば、かくの如き場合に於て、學者があらゆる研究方法に訴へ、まづその湮滅せる史實を復活せしめ、それに對する正確なる認識を與ふるに努むべきことは當然であり、その重要なる一手段として、考古學的探檢發掘究明が缺くべからざる役割を有することは、何人にも明白なるところである。然るに、我が國力の不足はまた我が學界に禍ひし、地理上當然我が國學者の研究對象として、最も活躍すべき東部亞細亞の考古學的研究探檢すらも、從來多く歐米學者の手に委して、殆ど顧みるものなき有樣で、滿洲・朝鮮・北支那方面以外では、僅かに鳥居龍藏氏等の東部蒙古探檢が日本學者の探檢として、唯一の談柄を供せしに過ぎないのであつた。而も、滿洲事變勃發の前年、外務省文化事業部の援助により、我が國新進の考古學者として令名ある江上波夫・水野清一兩君の內蒙古長城地帶探檢旅行が決行せられ、今やその研究報告の發刊を見るに至つたことは、我が國學者の當然なすべき任務を敢行せしもので、兩君の努力は啻に我が國學界の爲めのみならず、世界の學界に對する學問的貢獻として、大に推奬せらるべきこともとより多言を要せざるところである。

本書の內容については、既に多くの學術雜誌や新聞紙などで紹介せられたのであるから、改めて述ぶるにも及ぶまいが、主として昭和五年八月から十二月に亙り、江上・水野の兩君が內蒙古及び長城地帶を踏査して蒐集せられし、資料及びその研究を收錄せるもので、（一）蒙古細石器文化（二）綏遠青銅器（三）支那北疆に於ける繩席文土器遺蹟の三篇より成つてゐる。第一篇は內蒙古錫林郭爾 Silingol 地方の踏査によりて蒐集せし、所謂細石器について研究報告せるもので、曩に米國探檢隊やカールベック氏等により

て採集されし同種の遺物に、その數量を附加せしのみならず、更にその捜査範圍を擴大し、大型小型の各種打製石器より磨研石製品に亙り、蒙古新石器の特色定形を認定し、蒙古新石器時代に關する新知見を寄與し、併せて黑褐色粗質土器・櫛目文灰白色粗質土器・黝青色蓆文砂質土器等の鬲形・壺形・尖底形土器の併出に注目し、所謂蒙古細石器文化の時代が、上は黃河中原なる彩文土器の年代に併行し、下は西紀前第五世紀より西紀前後にかけ、スキート・シベリア式青銅器鐵器の文化が蒙古高原より支那北邊を蔽ふに至る頃まで存續せしものなるべきを推定してゐるのである。第二篇は所謂スキート・シベリア式青銅器に關する研究報告で、本書中最も興味あるまた最も重要なる部分を成し、その紙數の如きも第一篇の六二頁第三篇の四〇頁なるに對して二〇五頁を占めてゐる。隨つて、その內容も亦最も豐富であり、その研究對象たる青銅器も啻に綏遠方面に於て兩君及び三上次男君が親ら購入蒐集せしものばかりでなく、また張家口に於て購入せしもの、及び北平に於て購入し目下東京及び京都兩帝國大學に所藏する遺品をも抱括し、その種類も銅斧・銅鑿・銅劍・刀子・銅鏃・鐵鏃等より甲冑・馬具・裝飾品・古錢・印章・鏡鑑・動物形品等の各種に亙つて居り、支那に於ける文化發達の由來についても、亦多大の示唆を與ふるものあるを感ずるのである。第三篇の支那北疆に於ける繩蓆文土器遺蹟とは、北平・懷來・宣化・張家口・綏遠・包頭・五原方面にて蒐集せし繩蓆文土器及びその遺蹟に關する研究報告で、この地方に於ける古代漢民族の文化に關する研究である。而して、それ等の各篇には鮮明にして豐富なる圖版を附し、かつ卷末には英文の梗概を添へてゐる。たゞその體裁は、從來發刊されし「東方考古學叢刊」が、何れも大形なりしに對し、約半分の小形とし、前者を甲種(A Series)と名け、後者を乙種(B Series)と稱し、本書を以てその第一册として居り、今後適宜兩樣の體裁を以て出版するとのことである。隨つて、その外觀の堂々たることはもとより前者に及ばないのであるけれども、その取扱に便なると、その價額の廉なるとは、却つて學界に裨益するところ大なるべきを思ふのである。

以上述ぶるところによりて、不完全ながら本書の內容價値の如何なるものなるか、略〻之れを紹介したつもりである。たゞその推究論斷が果して盡く妥當であるか否かは、今俄かに斷言する能はざる箇所も見えないではないが、現在の東亞考古學界に於て、とにかく最新知識を抱含し、その研究報告の最高峯の一たるべきことは、疑ひなきところであらう。幸に亞細亞大陸に對する我が國力の進展も、今後益々著しきものがあり、隨つて、その研究探檢の便宜も亦愈々開かるべき機運に際し、將來に於ける斯學の發達も亦更に大いに刮目すべきものあるを、期待せざるを得ないのである。(定價拾圓)(橋本增吉)

近世經濟史概論(野村兼太郎著 同文館發行)

本書が、出版せられると、私は著者よりの寄贈を受け直ちに之を通讀する機會を得たことを感謝する。從來、近世經濟史を邦書を以て讀まうとすれば、先づ故瀧本博士或は本位田教授の著書を